

『大洞眞經』の實修における身體

——『雲笈七籤』「釋三十九章經」を踏まえて

金 志 玪

はじめに

若し大洞眞經を得る者は、復た金丹の道を須いざるなり。之を読むこと萬過、畢れば便ち仙なり。

（『眞誥』卷五甄命授）

これは『大洞眞經』の誦經を窮極の仙術とする有名なことばである。『大洞眞經』はこのような『眞誥』の記録や修行の階梯を強調する内傳の筋書きに沿い、上清經典の窮極の經典とされた。そして茅山の上清經典が三洞の最高の經典群となるにつれ、三洞全體において最上の經典として定着する。上清文獻の中で『大洞眞經』の窮極性は守三一

『大洞眞經』の實修における身體

法や『黃庭內景經』との對比を中心に強調され、『黃庭內景經』は不死の獲得に止まる在世の修行法、『大洞眞經』は昇天と七祖救済を圖る山中の修行法として位置づけられた。⁽¹⁾

從來の研究で『大洞眞經』における修行法の特徴として指摘されてきたのは「大洞廻風混合帝一之法」という高度化された體內神の存想法である。⁽²⁾しかし、『大洞眞經』の修行は體內神の存思という側面と共に、天界の存思という側面にも注目して、はじめてその窮極性が理解されるものと考えられる。この点について、『大洞眞經』の注釋とされる『雲笈七籤』卷八の「釋三十九章經」は新たな視座を

與えてくれるものと思われる。ところが「釋三十九章經」については、それがどのような性格のものか、何時ごろのものであるか、未だ定説といえるものがない。⁽³⁾ 本稿は、この注釋が古く六朝時代から『大洞眞經』を読む際に必ず参照すべきものとして用いられたことを明らかにし、その上で『大洞眞經』がどのように讀まれてきたのか、そして『大洞眞經』の誦經修行はどのようなものであったかについて、考察を進めていきたい。

一 「釋三十九章經」と「玉注」

『雲笈七籤』（以下『七籤』と略稱）卷八の「釋三十九章經」が『大洞眞經』の注であることについてはすでに指摘がある。⁽⁴⁾ しかし、「釋三十九章經」が『七籤』三洞經教部の「經釋」の一つであることからいくつか疑問が生じる。『七籤』卷八・卷九の「經釋」は編集者である張君房（十一世紀）の著述ではなく、該當の經典の中から適切な部分を抜粋し、その經典の解題としたものである。經典の解題に該當するところ、すなわち經典の別名・經典名の意味・神祕的な成

書過程・傳授の系譜などの記述を、他でもなくその經典の文章から抜書きするわけである。例えば「釋洞眞太上九眞中經」の場合は「太上九眞中經。一名天上飛文、一名外國放品」と始まるが、この文が『九眞中經』からの抄録であることは『無上祕要』や現行の道藏本との比較によって確認できる。⁽⁵⁾ つまり、『七籤』の「經釋」とは經典の文章を以って經典を解説する獨特な形式の解題であり、啓示經典として道教經典の特性やそれに對する道士たちの扱いかが窺える興味深いものである。⁽⁶⁾

「釋三十九章經」の場合も「大洞眞經云、高上虛皇道君而下三十九道君、各著經一章。故曰三十九章經、乃大洞之首也」と始まり、『大洞眞經』（『三十九章經』）に對する解題として『七籤』編纂期の『大洞眞經』から抄録されたものと考えられる。ところが、「釋三十九章經」の文章は『大洞眞經』の注の性格をもつものであり、現行の『上清大洞眞經』（朱自英（九七六～一〇二九）序、蔣宗英（十三世紀末）校勘本）の經文ではまったく見當たらず、經文の傍らに施された小字注と内容的一致をみせる。要するに問題は、「釋

三十九章經」が、その内容上では、『三十九章經』の注の性格をもち、「經釋」の引用の形式上では、『三十九章經』の經文の性格をもつということである。この點で「釋三十九章經」は「經釋」の中でも異例なものである。

ある經典の注でありながら、それ自身が經文であるというような、一見矛盾と思われる性格が兩立することを説明するために、試みに次のような假説を立ててみた。すなわち、「釋三十九章經」が基ついたテキストである『三十九章經』(以下混同をさけるため、『大洞眞經』と呼ばずこの名で稱する)には、經文の性格をもつ部分と注の性格をもつ部分が兩方入っていた。換言すれば、「釋三十九章經」はその内容的には、『三十九章經』の經文の性格をもつ部分に對する注として存在し、また形式上では、『三十九章經』の一部であつたから『三十九章經』の「經」文として看作されて拔粹されたのである、と。この假説を簡單に圖式化すると次のようになる。

『三十九章經』經文の性格の部分(「玉經」【祝詞】)

+ 注の性格の部分(「釋三十九章經」の抜

『大洞眞經』の實修における身體

二つの部分の具體的なことについては後述するが、以下、「釋三十九章經」の注としての性格を確認しながら、その上限年代についても考察していききたい。

まず『上清大洞眞經』の第一章と「釋三十九章經」の第一章を表に掲げ、「釋三十九章經」の注としての特徴と『上清大洞眞經』の小字注との關係を確認することしよう。
 (「上清大洞眞經」の語句と「釋三十九章經」の語句との對應部分に點線を引き、同じ丸番號を付した。そして『上清大洞眞經』の語句に施されている小字注は()に入れ、その中「釋三十九章經」と一致をみせるものは傍點を付した。なお、『上清大洞眞經』のテキストの構成要素を【⁸】の中に表記した。)

〔表一〕

『上清大洞眞經』卷二

高上虛皇君①道經第一

太微小童章

(中略)

大洞玉經曰、

高上洞元、元生九天②、炁祖太无③、衆風亂玄④、

玄曾絕散、四清撫閑⑤、帝一(大洞尊君號)上景、連衆攝烟、

長契一運、七世投閑、託靈屬命、反華自然⑥、

泯邈流虛、六曜沈遷、陵梵(玉帝君名)銜暉、西華彰安(白帝君名)、

併編帝簡⑦、盡得解源、胎田(符田)邃路(密處)、世發玉蘭、

靈光八暉、混生萬神。

玉清消魔王祝曰、

天有大隱生之寶(心)⑧、稱曰明梁(心)之上炁(辟、非烟)⑨、

守我絕塞之下戶(腎)、更受生率門(命門)之外、

迺又召益元(鼻神)之羽童⑩、列於綠室(人中)之軒⑪、

使解七祖百結、隨風離根、配天遷基、達變入玄。

元素高上神霄玉清王祝曰、

〔後祝詞二〕

第一章

高上虛皇君曰①、

元氣生於九天之上、名曰、「辟非」②。辟非之煙、下入人之

身、而爲「明梁之氣」。居人五藏之中、處乎心華之下。此至

氣之所在、長煙之所託③。能知辟非之由者、乃得「領祖太

无。」「領祖太无」者、盡體虛玄之大、冠道素之標矣④。」「益

元羽童」、乃人鼻之神也⑤。」「衆風亂玄」、人鼻之氣也⑥。」「四

清撫閑」、乃鼻下口上之閒也。當令鼻氣恒閑⑦。又當數加手

按。讀此篇、捻鼻閒、乃高上之正座、天獄之混氣、氣之來也

解百結、鼻神詔詔、列坐「綠室」。「綠室」者、脣上人中之際

也⑧。是以「帝一上景、攝煙連衆、長契虛運、反華自然」矣

⑨。「易有」者、九天之上西北之門、名也。若既登易有之門、

乃得昇帝堂之會⑩。然後五靈既化、森羅幽變、音暗(一云音

響)太和、萬唱幽發、百混九廻、還而順一耳⑪。」「太一隱生

之寶」、人之心也。乃明梁之所館、辟非之所棲⑫。是故七祖

反生、道濟帝簡⑬。高上之旨、理於此矣。讀高上之洞經既

畢、乃口祝曰、「三藍羅、波速臺」。此九天之祝言、高上之內

元氣本非生、五塗（五行）承虛出、雌雄（陰陽）寄神化、

森羅邃幽鬱、玉音響太和、萬唱无中發、仙庭回九變、

百混同得一⑩、易有（西北天門、名）合虛中、俱入帝堂會⑬。

畢、乃口微祝曰、

【天上內音・地上外音】

天上內音、三藍羅、波逮臺。⑭

地上外音、天命長、人恒寧。⑮

名也⑭。夫「三藍羅、波逮臺」者、於地上之音曰、「天命長、人常寧」也⑮。易有者、於地上之音曰、長臺。

表の『上清大洞眞經』と「釋三十九章經」の①を對照すると分かるように、「釋三十九章經」は『上清大洞眞經』の道經名として書かれている道君が、みずから經文の言葉を解説し、それを傳言する口訣の形式をとっている。道君によるこの解説は『上清大洞眞經』の構成要素でいえば、

體內神の存想法部分（存眞章名）から「存想法（二）」までを除き、【玉經】【後祝詞】「天上內音・地上外音」に施されている。特に「釋三十九章經」において、⑦の後に太字で表した「高上之旨、理於此矣。讀高上之洞經、既畢」が示すように、高上虛皇君の「道經」として認識されているのは【玉經】と【後祝詞】を合せた部分であり、この部分は「洞經」と稱されている。『上清大洞眞經』と「釋三十九章經」

に付した丸番號を比較してみれば、「釋三十九章經」の丸番號の順番が錯綜していることから分かるように、「釋三十九章經」に抄録された注釋は經文の順序どおりに注を付けたというより、經文の語句を繋げて通釋する特徴がある。

次に②⑧⑨を例として『上清大洞眞經』の小字注と「釋三十九章經」とを比較してみよう。『上清大洞眞經』の「玉清消魔王祝」の「天有大隱生之寶、稱曰明梁之上炁」の語句に施されている「心」と「辟非烟」という注記は、「釋三十九章經」にみえる②「元氣生於九天之上、名曰辟非」と⑨「辟非之煙、下入人之身、而爲明梁之氣。居人五藏之中、處乎心華之下」、そして⑧「太一隱生之寶、人之心也。

乃明梁之所館、辟非之所棲」の内容をまとめた注記であることが明らかである。このように小字注の多くは、三十九章にわたって、「釋三十九章經」に残存する注と内容的に一致をみせるが、小字注の中には「釋三十九章經」の内容と考えられない注記もみられ、「釋三十九章經」が抄録であることを勘案しても、小字注のすべてが「釋三十九章經」所載の注の内容であると看作することはできない。『上清大洞眞經』の小字注は誦經に際して、「釋三十九章經」所載の注、及び經文に現れる體內神の名字を喚起しやすくするために書かれたものと思われる。⁽⁹⁾

「釋三十九章經」に抄録されている文章とほぼ完全な一致をみせるのは、陳景元（一〇二五～九四）の『上清大洞眞經玉訣音義』（以下『音義』と略稱）所引の「道君玉注」である。例えば「表」の⁽¹⁰⁾の文は、「道君玉注」では「按道君玉注云、易有者、九天之上西北之門名也。若既登易有之門、乃得升帝堂之會室」（『音義』高上虛皇君道經第一「俱入帝堂會」條）とあり、「昇」が「升」と、「會」が「會室」と作られる以外、兩文は完全に一致する。また『音義』で引

く「道君玉注」が「釋三十九章經」と同一の體裁をもつ『大洞眞經』の注であることは次の文の検討から明らかになる。

經の第八章に「晨燈廣靈識」と云う。按ずるに道君玉注に云う、「晨燈者、乃玉眞天中有明炁之光、同照於三元之臺也」と。今二十章玉注、解せずと雖も、恐くは是れ此の義ならん。

（『音義』青精上眞內景君道經第二十「符籙晨燈」條）
これによれば、「晨燈」という言葉は『大洞眞經』第八章と第二十章の兩方にみえるが、⁽¹⁰⁾「道君玉注」もしくは「玉注」では、この言葉について、第八章にのみ注解があり、第二十章には注解がないという。一方、「釋三十九章經」第八章には「晨燈者、乃玉眞天中明氣之光、洞照於三元之臺也」とあり「道君玉注」の章數と文章に一致し、また第二十章には「晨燈」に關する解説がない點においても「道君玉注」と同じである。以上のような體裁と文字の一致から、⁽¹¹⁾『音義』所引の「道君玉注」（玉注）と「釋三十九章經」所載の注（三十九章經）で注の性格の部分は同一のも

のと考えられる。

では、「道君玉注」もしくは「玉注」は何時のものであろうか。その手がかりは陳景元が『音義』の末に付した『登眞隱訣』の引用文の中に見つけられる。

按ずるに、登眞隱訣第二 經傳條例に云う、大洞眞經、今世中に兩本有り、一は則ち大卷、前に回風混合の道有りて、辭旨假附す。多く是れ浮僞ならん。一本は唯だ三十九章有るのみ。…又聞く、楊・許の三十九章を得るもの有り、世中の小本と殊ならずと。既に未だ眼見せざる自りは、是非を測らず。且らく宜く繕寫し、以て品目を補うべし。又た玉注一卷有り、即ち是れ略ぼ洞經中の旨を釋す。亦た錄すべきなり、と。⁽¹²⁾

この『登眞隱訣』の文は、六世紀頃の『大洞眞經』に關わる陶弘景の記録であり、現行『大洞眞經』の諸本を判斷する際の據り所となる有名な記事である。これによれば、當時『大洞眞經』は大本と小本の二種類があり、また『大洞眞經』の注解である玉注一卷が存在したという。ここで陶弘景は經典の「品目」を補うために小本を、そして「洞

『大洞眞經』の實修における身體

經」の意味をだいたい解きあかしているので玉注を『登眞隱訣』に收録したと述べている。陳景元は直接『登眞隱訣』の「經傳條例」を見てそれを『音義』に載せている。そうであれば彼が「道君玉注」、「玉注」と稱しているのは『登眞隱訣』所收の「玉注」に他なるまい。現行の『登眞隱訣』は三卷を残すのみであるが、宋代には十卷本の『眞誥』に比べ二倍以上の分量を持つ二十五卷本の『登眞隱訣』があったこと、そして『登眞隱訣』に『黃庭內景經』が收録されていたという記事などを考え合わせれば、陳景元が目にした『登眞隱訣』に『大洞眞經』や「玉注」が收録されていた可能性は十分考えられる。以上のことを考えれば、『道君玉注』もしくは「玉注」と同一の『大洞眞經』の注である「釋三十九章經」（『三十九章經』での注の性格の部分）の年代は『登眞隱訣』の「玉注」の時代、すなわち六世紀前半に遡ることになる。

實際に、「釋三十九章經」の内容は六世紀末に完成された『無上祕要』をはじめ、諸々の類書から確認される。類書の性格上、語句の省略や文字の異同は避けられないが、

「釋三十九章經」の内容と一致すると認められる類書の記事を「釋三十九章經」の章ごとに振り分けて數えると、次の通りである。すなわち「釋三十九章經」の三十九章の内、「無上祕要」から二十五章、「太平御覽」から二十四章、「上清道類事相」から二十章、「三洞珠囊」から四章の記事が見つけれられる。これらの類書から「釋三十九章經」の内容が見当たらないのは第一章、第九章、第十一章、第十八章、第二十九章、第三十章である。

以上の類書の記事で「釋三十九章經」の文章と一致する内容載せる書名は、おおよそ『大洞玉經』『大洞玉經注』『大洞玉經三十九章』『大洞玉經三十九章注』『大洞玉訣』『大洞玉經訣』『大洞眞經』『大洞經』である。⁽¹⁵⁾まず、『大洞玉經注』『大洞玉經三十九章注』『大洞玉訣』『大洞玉經訣』の書名(「」注「」訣「」型)から考えられるのは、「釋三十九章經」(「三十九章經」の注の性格の部分)に近似するものが「登眞隱訣」の「玉注」一巻のように別行されたか、或いは一篇をなしていた可能性である。また『大洞玉經』『大洞玉經三十九章』『洞眞大洞經』『大洞眞經』の書名(「」

經」型)は、「釋三十九章經」(「三十九章經」の注の性格の部分)に近似するもの(「玉注」を包含した『大洞眞經』のテキストが存在したことを指し示す。『七籤』の「釋三十九章經」が基づいたテキストである『大洞眞經三十九章經』はこの後者の類型に該当する。⁽¹⁶⁾このことは前に立てた假説を支持するであろう。

以上のことをまとめると、「釋三十九章經」すなわち「三十九章經」の中で注の性格をもつ部分は、「登眞隱訣」の「玉注」に相當するものが『大洞眞經』の一部として編入されたものと考えられる。この注釋は、『七籤』と類書の引用から分かるように經文自體と看作されることもあり、『上清大洞眞經』には小字注として再編入されている。さらに、現行本『大洞玉經』では、趙守眞の注の中でも大半がそのまま用いられ、清代の『元始大洞玉經』の中でも一部ではあるものの、「道君」の言葉として持續的に用いられている。⁽¹⁷⁾このように「釋三十九章經」に残存する注釋(「玉注」)は、六朝時代から『大洞眞經』の一部として重んじられ、『大洞眞經』の讀誦に缺かせないものであったと

いえる。

二 「釋三十九章經」を踏まえた

『大洞眞經』の修行

『大洞眞經』は基本的に存眞章名が表す體內神のパンテオンと道經名が表す道君のパンテオンという二重構造を持っている。「釋三十九章經」と付き合わせれば、このような二重構造は空間的な具體性を持ってより鮮明になる。

三十九章の存思法（『存眞章名』『存思法二』『存思法三』）に書かれている體內神の數は、實際は五十九眞であり、別名を除いてもその名字の數は一七七に至る。これら神々の居場所は、五臟六腑は勿論、指先や鼻先まで、體內のいたるところにある宮室や氣の門戸に明確に定められている。

その一方、三十九道君は高上虛皇君（第一章）、玉晨太上大道君（第十四章）、金闕後聖君（第三十章）など、上清經の最高レベルの神々である。これら道君のイメージや居場所はあまりに漠然としているが、それらは「釋三十九章經」を洞經（『玉經』〔後祝詞〕）と照らし合せてみることによっ

『大洞眞經』の實修における身體

て明らかになる。洞經は道君の名前とおおよそ同じ語句で始まり、その冒頭は常に道君たちの天界の風景を描寫している。例えば、金闕後聖太平李眞天帝上景君道經は「金闕上景炁、十方輝紫烟」（第三十章）と始まり、黄金の宮闕に立ち上る後聖帝君の紫色の氣が十方世界に照り輝く様を描く。しかし、ほとんどの場合はこの例ほどは鮮明ではない。太元「无」晨中君峨眉洞室玉戸太素君の洞經は、「太无太素、洞景幽玄」（第三十八章）と始まるが、これだけではどういうイメージなのか捉え難い。「釋三十九章經」をみると「太无は洞景の表に在り、太素は幽玄の上に在り。九宮 金門を列ぬること太素の表に於いてし、丹樓 七重を沓ぬること太无の庭に於いてす」とある。これによれば、太无とは光に満ちた天上にある太无晨中君の天界、太素とは薄暗い天上にある太素君の天界と解釋されたことが分かる。そして太无の庭には七層の赤い樓閣が建ち、太素君の天界には九宮や金門が連なっているとされており、空間の廣がりに伴うイメージが喚起される。

このように、「釋三十九章經」を付き合わせてみれば、

道 君 の 世 界	
道 君	天 界
1. <u>高上虚皇君</u>	<u>九天・易有(西北之門)・辟非(九天之氣)・帝堂</u>
2. 上皇玉虚君	九天・ <u>明眞之臺</u> ・德刃【刃】之臺
3. 皇上玉帝君	玉清天・空青之林・雲景・金房・晃朗之門・濯耀羅(日)・圓光蔚(日)・玄上之幡(反華之幡)
4. 上皇先生紫晨君	九天之上太冥・玉清天・綺合臺・萬津之海・ <u>金墟之館</u>
5. 太微天帝君	九天・明霞之上金房・ <u>瓊闕之内九戸</u> ・ <u>玉清天中龍山臺</u>
6. 三元紫精君	太無中紫精之天・上景之衝・三元之氣・玉清天中秀朗臺・太混殿館・羽明之車
7. 眞陽元老玄一君	上清・眞陽館・逸宅(眞氣之明堂)・太上瓊羽之門・玉闕金臺
8. 上元太素三元君	太素三元宮・三華炁・三元之臺・玉眞天・晨燈(明氣之光)・上清之廣靈堂
9. 上清紫眞精三素君	上清紫精天・育華之林・上清玉房・三便(太上之金房)
10. 青靈陽安元君	玉清天・八氣・三華房
11. 皇清洞眞道君	上清天・太無・廣漠・虹映山(九日之所出・月帝所司)
12. 高上太素君	紫霄・玉清・玉根山・玉門・蘭室(門戸)・眇景(日)・月中竊樹
13. 皇上四老道中君	日中無影・玉清天・廣霞山(九日之所出・日帝所司)・九曜生(日)・明玉之輪
14. 玉晨太上大道君	玉晨天・上清天・玉映之室・八素(車)・四明(玉帝南門)
15. 太清大道君	太清天・浮絕空山(三天神王所治・ <u>大道眞氣所結</u>)・金華樓・太明(日)
16. 太極大道元景君	太極天・ <u>秀華山</u> ・山下有玉堂・太清外・太漠・圓明(日)丹室
17. 皇初紫虚【靈】元君	皇初紫元之天・暉暉之光(九日之所出)・寒童山・六淵宮
18. 无英中眞上老君	上眞之宮・紫房・明堂
19. 中央黄老君	黄素炁・太微天・玉壽山・圓華宮
20. 青精上眞内景君	青精宮・内景天・上華室・紫空山・羽逸之車・玉室
21. 太陽九氣【炁】玉賢元君	太陽九氣・玉賢天・三晨・紫輶・微玄(日)

〔表Ⅱ〕『大洞真經』の世界

體 内 の 世 界				
體 内 神	名	字	居 處	
1. 太微小童	干景精、三衿交、對帝眞	會元子	舌本之下、血液之府	
2. 太一尊神	務猶收、解明、寄頻	歸會昌	玉枕之下、泥丸後戶	
3. 〔玉〕帝君	延陵梵、七神、神丈人	履昌靈	兩眉中間、紫戶之外宮	
4. 左無英公子	玄元叔、元素君、神公子	合符子	左腋之下、肝之後戶	
5. 右白元洞陽君	鬱靈標、朱精、啓成	玄夷絕	右腋之下、肺之後戶	
6. 中央司命丈人	理明初、神宗、神靈華	玄度卿	心房之中、四〔血〕孔之戶	
7. 命門桃君	孩道康、命王、胞根	合精延	臍中之關、命門外〔內〕宮	
8. 泥丸天帝君上一赤子	玄凝天、伯無上、伯史華	三元先	泥丸中、九孔之戶	
9. 終宮中一元丹皇君	神運珠、生上伯、央雲拘君	子南丹	項中之大椎、骨首之戶	
10. 命門下一黃庭元王	始明精、嬰兒胎、伯史原	元陽昌	兩髀〔臍〕之間、車軸下〔之〕戶	
11. 泥丸九眞	帝昌上皇	先靈元宗	口之四際	
12. 臍中八眞	含景君	北臺玄精	背之中〔窮〕骨之下節	
13. 兩腎七眞	玄陽君	冥光先生	背之窮骨、〔九〕地〔之〕戶	
14. 肺中六眞	上元素玉君	梁南中童子	頸外十二關梁	
15. 脾中五眞	養光君	太昌子	喉內極限之戶	
16. 肝中四眞	青明君	明輪童子	胃管〔臍〕之戶、膏膜之下	
17. 精血三眞	元生君	黃寧子玄	鼻兩孔之下源	
18. 骨節〔胃脘〕二眞	堅玉君	凝羽珠	太倉之府、五腸之口	
19. 心中一眞	天精液君	飛生上英	胸中四極之口	
20. 九元之眞男	拘制	三陽	左耳之下、伏晨之戶	
21. 皇一之魂女	上歸	帝子	右耳之下、伏晨之戶	

- | | |
|-------------------------|---|
| 22. 太初九素金華景元君 | 太初天・九素氣・華景宮・慶液之河(吉人之津)・流汨之池・ <u>西田瑤臺</u> |
| 23. 九皇上眞司命(道)君 | 玉虛天・飛霞山・晨暉宮・四司(天帝禁宮) |
| 24. 天【太】皇上眞玉華三元君 | 神徊之車・雲飈之宮・流逸之室・廣寒宮・寒庭 |
| 25. 太一上元禁君 | <u>太一上元天</u> ・金華山・ <u>五道之玉房</u> |
| 26. 元虛【靈】黃房眞晨君 | 元虛黃房・玉宮(得道符籙所在) |
| 27. 太極主四眞人元君 | 太極・凌羽之車(雲氣之結)・上清・高上之天・太明之丘・朱火之臺 |
| 28. 四斗中眞七晨散華君 | 玉清天・散華臺・七晨天・三寶山・四斗・金琅之館・映清夷之宮 |
| 29. 辰【晨】中黃【皇】景元君 | 元晨天・ <u>三秀山</u> ・ <u>黃景之氣</u> ・太霄之庭・滄浪之臺・太霞之宮 |
| 30. 金闕後聖太平李眞天帝上景君 | 金闕・上景之氣・月宮之庭・天堂 |
| 31. 太虛後聖元【无】景彭室眞君 | <u>太虛天</u> ・ <u>空无景之山</u> ・太霞・彭彭之室 |
| 32. 太玄都九氣丈人主仙君 | 太玄天・太玄都・晨徊之風・蕩滯之山・ <u>空峯山</u> ・太暉之宮 |
| 33. 上清八景【皇】老君【洞清八景九玄老君】 | 絕霞之外・上清天・廣琅之車・金華便山・太老之堂・太寶(日)・九華(月) |
| 34. 東華方諸宮高晨師玉保【仙】王青童君 | 始暉(日出所鄉)・東華(仙眞之州)・雲波山・雕玉之駟・圓珠・紫曜明(日) |
| 35. 扶【搏】桑太帝九老仙眞君 | 搏桑之際・ <u>會方之臺</u> ・九老京(山)・合羽之車・朱室・玉堂 |

22. 紫素左元君	翳鬱無刃【刃】	安來上	頭面之境
23. 黃素中元君	圓華黃刃【刃】	太張上	胸腹之境
24. 白素右元君	啓明蕭刃【刃】	金門上	下關之境
25. 日中司命君	接生	〔道靈〕	左手〔通眞之戸〕
26. 月中桃君	方盈	〔運梁〕	右手〔通眞之戸〕
27. 左目童子	飛雲【靈】	〔陽光〕	〔左目〕
28. 右目童子	晨嬰	〔陰精〕	〔右目〕
29. 肺部童子	素明	〔無映〕	兩目【肺部之下五關】
30. 胎中一元白炁君	務玄子	育尙生	五藏之上、結喉之本戸
31. 太一精魂	玄歸子	盛昌	同上
32. 結中青炁君	案延昌	合和嬰	五藏之下、大胃之上口
33. 元君精魂	保谷童	明夫	同上
34. 節中黑炁君	斌來生	精上門	九腸之口、伏源【梁】之下
35. 帝眞精魂	幽臺生	觀上生	同上
36. 胞中黃炁君	祖明車	神無極	小腹之内、二孔之本
37. 天帝精魂	理維藏	法【運】珠	同上
38. 血中赤炁君	混離子	叔火【寶】堅	百關之血【穴】、絶節之下
39. 司命精魂	發紐子	慶玄	同上
40. 上玄元父君	高同生	左回明	本命之根、胞胎大結
41. 下玄玄母	叔火王	右回光	
42. 帝皇太一	重冥空	幽寥無	
43. 九帝尊神	日明眞	衆帝生	
44. 太常【帝】精魂	陽堂王【玉】	八靈	
45. 天帝九關魂	録【縁】廻道	絶冥	
46. 天紀帝魂	照無阿	廣神	

- | | |
|--|--|
| 36. 小有玉眞萬華先生主圖
玉君 | 小有玉眞天・萬華之宮・高元山・羽明之駢・三素之
景・太無中洞觀之堂・重泉曲(魔王之陰符) |
| 37. 玄洲二十九眞伯上帝司
禁君 | 玄洲・三溺之津・重漢之山・太無之庭・羽景之堂・日
月之駢・帝川之池・絕空之宮 |
| 38. 太无[元]晨中君刊峨眉
[帽]山中洞宮[室]玉戸
太素君 | 峨嵋山・洞宮玉戸・洞景之表・太无天・幽玄之上・太
素天・九宮・金門・太无之庭・丹樓・太霞之嶽・五聞之
山 |
| 39. 西元龜山九靈眞仙母
青金丹皇君 | 崑崙山・九靈之館・金丹流雲之宮・上璇璣之輪・下
太空中・西元龜山(崑崙之西)・流剛山上暉景之
室 |

は『七籤』卷八「釋三十九章經」と類書の引用文、『上清大洞眞經』の經文を參考として作成したものである。類書で『大洞玉經』『大洞玉經注』などと引用される文の中、「釋三十九章經」に見えないが、『上清大洞眞經』『玉經』【後祝詞】の言葉の注と判断されるものは、玉注の佚文と看作し、點線で表した。）

47. 三素老君	牢張上	神生道	鼻下人中
48. 正一左仙	仲成子、帝質	四【西】華	
49. 正一右仙	曲文子、光堅	靈和	
50. 中央玄一老子	林靈天【虛夫】	靈時道	陰莖之端
51. 北方黑帝	保成曷【昌】	北伐【代】	兩膀胱中
52. 西方白帝	彭安幸	西華	陰囊中
53. 南方赤帝	長來覺	南和	口舌中
54. 東方青帝	彫梁際	青平	五臟外
55. 〔中央黃帝〕	〔含光露〕	〔中細〕	〔脾胃中〕
56. 〔泥丸上一〕帝卿	肇勒精、起非、常扶	仲玄生	入帝一之室
57. 絳宮中一〔輔卿〕	中光堅、幽車伯、董史華	四化靈	
58. 黃庭下〔一〕弼卿	歸上明、奉信伯、奉光生	谷下玄	
59. 帝一尊君	父寧〔在〕	〔合〕母精	帝一變百神、合靈西丹皇、…練我返嬰蒙。 大洞廻風混合帝一之法

〔表Ⅱ〕『大洞眞經』の世界

（「體內の世界」の部分）『雲笈七籤』卷三十の「大洞廻風混合帝一之法」に従った。ただ『上清大洞眞經』の文字と異同がある場合、増字は〔 〕に、異字は【 】に入れて表した。「道君の世界」の「道君」名は『雲笈七籤』卷四十二の「存大洞眞經三十九眞法」の道經名に従い、道藏本、『音義』、『釋三十九章經』などと文字の異同がある場合は同じく、〔 〕と【 】で表した。「天界」の部分

九天・玉清・上清・太清・太極・太微という天界やその中に位置する道君たちの宮殿や聖山が、具體性と空間のイメージを持つて展開される。これら道君の天界は、上清經典においては『三天正法經』という惡氣に満ちた六天を淨化した上で、初めて出てくる窮極の天界である。⁽¹⁹⁾その意味で天界の入り口や太陽の名前などを具さに解説している⁽²⁰⁾「釋三十九章經」は、これら天界に對する、道君によって啓示された一種の地理志のような側面を持つものといえる。

以上の天界と體內という『大洞眞經』の二重の世界圖、その大綱を表にすると「表Ⅱ」のようになる。

表の左側は「存思法」による「體內の世界」を表し、右側は「釋三十九章經」を踏まえて「洞經」の言葉から構成した「道君の世界」を表す。

『大洞眞經』が提示しているこれら二つの世界は、修行者にしてみれば、ただ單なる文字上の記述ではない。修行者にとってこれらの世界は經典を媒介として再構成される實在世界なのである。このような經典の修行は氣の感應シ

ステムの上に成り立っている。氣が自然に凝縮して文字となり、經典となったするのは、道教經典における一般的な觀念である。そこでかりに三十九洞經の天界を大洞の世界というなら、三十九章の洞經の集大成である『大洞眞經』は、大洞の世界と同類の氣で構成されていると考えることができる。大洞の世界↓『大洞眞經』↓修行者という構造において、修行者が大洞世界に働きかける方法は二つに大別できる。一つは存思による働きかけであり、もう一つは誦經の聲による働きかけである。これらの氣の感應については陳景元の次のような記述より窺うことができる。

妙音 九徹し、眞聲 高唱すれば、文炁 玉虛と與に玄に參じ、霞味 太陽と俱に暢ぶ。脣を動かし發吐すれば、則ち玉華 立ちどころに至り、靈句を諷詠すれば、則ち契を太上に携う。靜止して接拱すれば、則ち紫房 自から觀ぜられ、期する所を思念すれば、則ち類に觸れて感動す。所以に七祖 福を獲、籙を仙宮に受け、越ゆること幽鬼従りし、俱に朱陵に宴す。

誦經の聲により、經典という形に凝縮された氣が活性化され、天界の働きに參與し、體內の氣に天の精氣が加えられる。祕密の名字の發音は仙女を呼び寄せ、經典の諷詠は太上道君より神仙となる約束をもたらす。これらは音聲による感應である。その一方、存思により北極、或いは九宮の紫房が顯れ、さらには、自分のみならず同類の氣を持つ七祖まで救い上げることができる。これらは存思による感應である。

以上の考え方を踏まえて洞經の讀誦の場面を考えてみよう。その場面では表の二つの世界は體內と天界というふう
に固定的に兩立するのではなく、氣の感應によって相互に
交差し、天界の道君の氣は身體へ入り込み、體內の神は天
界に現れる。

まず、體內の神々が天界に現れる場面である。九靈眞仙
母青金丹皇君の洞經(第三十九章)の經文は次のとおりであ
る。

西元に九靈の炁あり、金丹の流雲宮、上は旋曜杪を極
め、暉景 太霞中にあり。…室に胎仙母有り、衿を太

帝皇に携う。玄一靈時生、三老素牢張、左に兆の符籍
を把り、右に理神宗を携え、共に琳龍闕に登り、玉清
房に稽首す。

「釋三十九章經」の解説を想起しつつ「西元九靈炁」と
讀み上げると、この局面で修行者の上に浮び上がるのは、
西王母の氣が立ち昇る崑崙山の九靈館、北斗七星に接する
ほど高く聳え立つ宮觀、西王母の氣が光輝く大空、といっ
たイメージになるであろう。このような西王母の天界に、
玄一靈時生と三老素牢張は修行者の仙籍を持ち、理神宗と
ともに崑崙の入り口に登り、玉清房で挨拶している。これ
ら三神はそれぞれ陰莖の端の玄一老子(表の左側第五〇番)・
人中の三素老君(同第四七番)・心臟の司命丈人(同第六番)
⁽²⁾である。體內に鎮座していたこれら三神は突然、崑崙の天
界(表の右側第三九番)に現れるのである(表の□)。

この場面における修行者の空間感覺のようなものを考え
てみよう。司命丈人は心臟に定位している。司命丈人の名
が出てくると、最初は胸の中を思うであろう。或いは、心
臓そのものを感覺するかもしれない。ところが、司命丈人

が崑崙山の宮闕へ昇っていくと、それにつれて空間の感覺は、胸の中から遙か遠い天界、崑崙まで廣がるであろう。

次に、天界の道君の氣が身體に入りこむ場面である。

「高上洞元、元生九天」と高上虛皇君の洞經（第一章）を讀み上げると、高上虛皇君の天界に遍く行き渡る九天の元氣が浮かび上がる。その元氣の名はすべての邪を取り除く「辟非」である（『釋三十九章經』）。そして祝文を「天に大隱生の寶有り、稱して明梁の上氣と曰う」と唱える。そこで「釋三十九章經」に「辟非の煙、下りて人の身に入り、而して明梁の氣と爲る。人の五藏の中に居り、心華の下に處す」とあるのを思い出せば、高上虛皇君の九天の元氣が胸の中に入り込むのを存思することになるであらう。

このような場面については、九華安妃が歌った芥子の比喻にヒントを得ることができるかもしれない。

芥子 忽ち萬頃あり、中に須彌山有り、小大は固より殊り無く、遠近は同に一縁たり。（『眞誥』卷三運題象）

芥子粒はたちまち萬頃に廣がり、そのなかに須彌山が現れる。極微の中に包攝される極大、極大でありながら極微

に入りこむという不思議は、誦經の場における身體、そのイメージに近いのではないだろうか。

洞經の讀誦は『大洞眞經』の修行の中核をなす部分である。繰り返される誦經過程において三十九洞經の天界は、たかも曼荼羅のように次々と浮かび上がり、體內神が天界に現れる場面と天界の道君の氣が身體に入りこむ場面の二つは、三十九章にわたって幾度も現れる。その過程において天界の次元が體內へ收斂され、身體が天界へ擴大することも無數に繰り返される。これらの過程によって身體と天界という内と外との區別はなくなり、壯大な混然一體の世界が現出する。三十九天より身體隔々まで「あまねく貫いて」（洞）「一體となる」（大）、という意味で、『大洞眞經』の修行は身體を「大洞化」するものといえる。「之を讀むこと萬過」（『眞誥』卷五）というのは、このような大洞の體現を成し遂げるために缺かせない過程である。『大洞眞經』の中では誦經のことが次のように詠われている。釋三十九章經」に基いて譯してみよう。

玉音響太和 誦詠の聲が調和の旋律で響き渡ると、

萬唱无中發 幽遠な太無の世界は壯大な和音で反響する。

仙庭回九變 仙人の中庭を九回巡り變化をなしとげ、

百混同得一 あらゆる神を混合して一體となせば

易有合虛中 變容の天門を通り抜け太虛の世界に合一

し

俱入帝堂會 すべての存在と共に天帝の堂に入る

(高上虛皇君道經第二)

むすび

本稿は、「釋三十九章經」が『大洞眞經』に組み込まれた「玉注」の一部を残していることを明らかにし、「釋三十九章經」に依據した『大洞眞經』の修行がどのようなものであったかを考察した。

まず、「釋三十九章經」(玉注)は六朝時代よりそれ自身が經典とみなされ『大洞眞經』の一部をなしていたことは、第一節で論じたとおりである。それが新たな注釋者たちの手に移り、テキストとしては多様な變遷を辿りながら

『大洞眞經』の實修における身體

も、その内容に殆ど變化がないという事實は、「釋三十九章經」(玉注)が『大洞眞經』の奥義を示す啓示書として重んじられてきた、その獨特な歴史を物語るものである。

そして『大洞眞經』の體內と天界という二重の構造は、「釋三十九章經」と付き合わせることでより明らかにする。「釋三十九章經」は洞經の言葉に空間的な具體性をもたせる特徴を持っていた。それは、三十九眞を體內の場所に定位する「存思法」と首尾一貫して、三十九道君の天界に空間的な具體性を賦與するものである。『大洞眞經』の修行の過程は、體內神の存思を通じて體內に極微の世界を、天神の存思を通じて天界という極大世界を構成し、その上で二つの世界の錯綜、融合を繰り返すことによって、内と外という空間の境界を消失させ、それによって大洞を體現するものといえるであろう。

註

(1) 上清派内部の『大洞眞經』の傳授や上清經典における『大洞眞經』の地位については麥谷邦夫「『大洞眞經三十九章』をめぐって」(『中國古道教史研究』同朋舍出版、一九九二)

五五～六八頁参照。

- (2) Isabelle Robinet, *Taoist Meditation: The Mao-Shan Tradition of Great Purity*, State University of New York Press, 1993, Julian F. Pas & Norman J. Girardot 英譯本 (原著は *La Méditation Taoïste*, Paris: Dervy Lives, 1979) Chapter 3, The Book of Great Profundity, 97-117. 麥谷氏、上掲書、七五～八二頁。卿希泰主編『中國道教史』(四川人民出版社、一九九六)第三章、三三七～三五二頁。

- (3) 陳國符『道藏源流考』(中華書局、一九八五)一九頁。陳國符氏は『上清大洞眞經』を小本と推定し、「釋三十九章經」については『上清大洞眞經』にその文が見えないことから、大本の『大洞眞經』の一部ではないかと推定した。筆者は「上清大洞眞經」については大本に近いとする麥谷氏の説に従うが、「釋三十九章經」の内容を『大洞眞經三十九章』の一部と看做すことについては陳氏に賛成する。麥谷氏は「釋三十九章經」の内容と『上清大洞眞經』の小字注との一致について指摘したが、その年代について言及がない。ただ、その注釋が底本としている『大洞眞經』が敦煌寫本と近い形であることを指摘した。麥谷氏、上掲書、七四～七五頁。ロビネ氏はこの注釋が『大洞眞經』に缺かせない注釋であり、類書の引用でこの注が『大洞眞經』そのものと認識されていたことを指摘した。上掲書、八六頁。筆者もこの説に賛同する。た

だロビネ氏の『大洞眞經』の概説にはこの注の内容が反映されていない。

- (4) 麥谷氏、前掲書。ロビネ氏、前掲書。注(c)参照。
- (5) 『無上祕要』卷三十所引洞眞太上九眞中經「洞眞太上九眞中經、一名天上飛文、一名外國放品、一名神州靈章。雖有四號、故一書耳」。「上清太上帝君九眞中經」(道藏正一部)にも同文がある。
- (6) 『七籤』の「經釋」が持つこのような性格は、上清經典の獨特な文獻的性格に絡むと思われる。その性格とは自身の中に眞人の口授とされる解說的記述を持つという点である。これについては別の論稿を必要とする。ただここでは四十餘種の經錄の解説に當たる「經釋」の文章は、概ね『無上祕要』の該當經典の引用および現行道藏本の該當經典の文から同文が見つかるということを指摘しておきたい。近年中華書局から出版された李永晟氏の標點本『雲笈七籤』(「經釋」)の校勘作業も、「經釋」が該當經典からの拔書きであるという理解のもとで行われたものである。
- (7) 『上清大洞眞經』及び『大洞眞經』の諸本に關する考證は麥谷氏の前掲書、六八～七五頁参照。
- (8) この内、「存思法一」は『七籤』では卷三十「大洞廻風混合帝一之法」、「存思法二」(前呪を含む)と「後祝詞」は『七籤』卷四十二「大洞消魔神慧内祝隱文存諸眞法」に一致するものである。

(9) 『上清大洞真經』第一章の小子注の帝一(大洞尊君號)、陵梵(玉帝君名)、西華彰安(白帝君名)はそれぞれ第三十九章、第三章、第三十七章の存想法に説明される體內神の名字である(表Ⅱ)の五九、三、五二番)。

(10) 『上清大洞真經』では、第八章は「晨燈廣靈堂」、第二十章は「符籙登晨」と作る。

(11) 『晉義』所載の「道君玉注」は十一條あるが、その内「釋三十九章經」の文と完全に一致するのは六條(第一、第三、第八、第九、第二十六、第三十八章)、部分的に一致するのが一條(第十二章)あり、「釋三十九章經」に見當たらぬものが四條(第三、第十三(一條、第三十一章)ある。この四條も、「釋三十九章經」が抄録である點を考えれば、その文が「三十九章經」に入っていた可能性は高いと思われる。

(12) 「按登真隱訣第二經傳條例云、大洞真經今世中有兩本、一則大卷、前有回風混合之道、而辭旨假附、多是浮僞。一本唯有三十九章。…又聞有得楊許三十九章者、與世中小本不殊、自既未眼見、不測是非、且宜繕寫、以補品目。又有玉注一卷、即是略釋洞經中旨、亦可錄也。」

(13) 『舊唐書』卷四七經籍志「登真隱訣二十五卷」。『新唐書』卷五九藝文志「登真隱訣二十五卷」。『郡齋讀書志』卷一六神仙類「登真隱訣二十五卷。右梁陶弘景撰。…凡七篇十七條。『郡齋讀書志』卷一六「眞誥十卷…本七卷」。後志「眞誥七卷」。

『大洞真經』の實修における身體

(14) 黃伯思(一〇七九—一一一八)『東觀餘論』卷下跋黃庭內景經後「黃庭內景乃其一也。…自楊許仙去、大傳于世、而積載既久、轉寫多誤。…惟華陽登真隱訣所載、乃楊許舊本。可以據依。今余讎衆本、而以隱訣是正、庶幾不失。」

(15) 各類書において「釋三十九章經」と一致する記事の引用書名は次の通りである。

『無上祕要』卷三目品「大洞正經」、卷四靈山品「玉眞大洞玉經」、卷四神永品「洞眞大洞經」、卷十九天帝衆眞儀鶴品「洞眞大洞玉經」、卷二十三眞靈治所品「洞眞大洞玉經」、「太平御覽」:「大洞玉經」「大洞玉經」「太洞玉經」「太洞玉經」「大洞玉經注」「太洞玉經訣」「大洞眞經。『上清道類事相』:「大洞玉經三十九章經」「大洞玉經注」「大洞玉經」「大洞玉訣」「大洞玉經注」「大洞玉經三十九章經注」「大洞玉訣」「大洞玉經三十九章注」。

類書所載の『大洞眞經』條の文は「釋三十九章經」以外に『上清大洞眞經』の「玉經」(後祝詞)及び『上清高聖太上大道君洞眞金玄八景玉籙』(「七籤」卷八「釋太上大道君洞眞金玄八景玉籙」、卷一〇一「上清高聖太上玉晨大道君紀」、また「七籤」卷一〇一「三天君列紀」、「百神內名經」から同文が確認できる。

(16) 『大洞眞經』の諸本についての研究は、注十二に挙げた「登真隱訣」の記事に基づいて諸本が大本と小本のどちらに該當

するかを判別することに主眼が置かれ、玉注についての言及は注目されていなかった。しかし本文で論證したように、六世紀後半にはすでに玉注が組み込まれたテキストが存在したと推定される。また『上清大洞眞經』も小字注の形ではあるが、玉注の一部を含んでいる。このことを考慮すれば、『大洞眞經』のテキストを考える際には、『登眞隱訣』という大本の巻頭に付されたとする「回風混合之法」、「三十九章」（小本）、「玉注」を『大洞眞經』の構成要素として扱い、それらの組み合わせから様々なテキストが作られた可能性を考えるべきであろう。

「釋三十九章經」が基いていた『三十九章經』は、『七籤』で『三十九章經』として引用される文（卷七、卷四二）を集めれば再構成できる。「表一」の「一」に記した『上清大洞眞經』の構成要素を使って表すと、『道經名』『存眞章名』『存思法二』『玉經』『後祝詞』『天上内音・地上内音』『玉注』という要素から構成される。『上清大洞眞經』は、このような『三十九章經』と同じ要素を備え（ただし『玉注』は小字注の形で再編集）、「回風混合之法」の一部を「存思法一」として各章に分散配置し、巻末に「回風混合帝一祕訣」を付した構成をとる。

(17) 道藏本『大洞玉經』は、韻文の「玉經」部分は文昌本系であり、注は「釋三十九章經」と内容の一致をみせる。この注は明の龔德同の跋文によれば、元代の道士と思われる趙守眞

が書いたものである。この注が「釋三十九章經」と一致することは趙守眞が「釋三十九章經」に近似するものに基づいて注を作ったことを意味するであろう。『大洞玉經』巻下「太玄真人呪曰」の注「真人姓趙、諱守眞、主太玄清明宮。」龔德同跋文「乙巳（一三六五）歲菊月、有國子助教豫章太古熊麟、初棄官學道、究竟大洞經旨、由盱江麻姑來山中、携至所抄大洞經本、乃有昔皆太玄趙真人所注經義、其中多是身中百神名字、所主所居宮分山林樓臺池館、一一明白」。

(18) 道藏輯要本『元始大洞玉經』は康熙年間に紫虛元君（魏華存）を再降臨させ「玉經」に新たな注釋を加えたものである。その中で「釋三十九章經」の内容は各道經の道君の言葉として載せられている。一例を挙げると、『元始大洞玉經』高上元皇君道經第一には「又高上虛君有曰、衆風胤玄、人鼻之炁也」とあるが、これは「表一」の「釋三十九章經」の④と一致する。

(19) 『太上三天正法經』『太上告後聖曰、凡受三天正法、當爲三天立效佐時、除凶、使正道演明、六天殄滅也。』：限目内思己身吐炁、炁化爲火光精流、竟天鬱冥、焚燒四方天下、山林草木土地、靈司人民、悉令蕩盡、竟天冥然、無復孑遺、洞達無涯、炁都消、消炁鬱勃、上則無天、下則無地、率天以下、莫不歸宗於虛無。金門玉闕、瓊宮紫殿羅列、及己身俱在空虛之中清炁之内」。

(20) 天門の例：「易有者、九天之上、西北之門名也」（第一章）、

「玉門・蘭室、竝是上清宮中門戶名也」(第十二章)、「四明者、上清玉帝之南門也」(第十四章)。太陽の名前の例：「九天真人呼日以濯耀羅。三天真人呼日爲圓光蔚」(第三章)、「太極真人呼日爲圓明」(第十六章)。「東華真人呼日爲紫曜明。或曰圓珠」(第三十四章)など。(傍點は經文の言葉)

(21) これら三神については『大洞玉經』第三十九章の趙守眞の注に「靈時者、中央玄一老子之字也。牢張上、三素老君名也。神宗、中央司命丈人名也」とあることから、それぞれ第三十七章、第三十六章、第六章の存想法でいう玄一老子、三素老君、司命丈人と讀まれたことは確かめられるが、詳しい考證は紙面の制限で割愛せざるを得なかった。實際、これらの例でみるように、「玉經」と「祝文」の中で體內神の名字と考えられることはが「存想法」の名・字・別名と一致しないものも相當存在し、神々の別名は「存想法」にまとめられたものに限らない。それには版本の文字の異同か、韻と字數を合わせるためにもたらされた變更か、恐らく色々な理由があるであろう。これらの言葉が神名として確かめられるのは、注記や師匠の口訣によるのであろうが、これら注記は様々な上清經の讀誦を積み重ね、さらに『大洞眞經』の讀誦を繰り返して得られる結果といえる。

三神の中、「理神宗」だけを取り上げて第六章の中央司命丈人と比べてみれば、司命の名は理明初、字は玄度卿(第六章「存想法」)その別名は神宗、或いは神靈華であり(「七

籤」卷三〇)、理神宗と一致するものはない。しかし、『上清大洞眞經』の經文の中で司命神と理神宗とが關連する語句を探すと、「太一把籍、司命理神」(第三十六章「後祝詞二」)があり、また「丈人號神宗」(第三十七章「後祝詞二」)とある。「司命は神を理む」という語句から、理神宗は「神々を理める宗主」という意味の司命神の別名と理解されるであらう。